明治廿年十月二十日發兌

いらつめ

第六號

目次

例言

本誌の目的は婦人の職分を全くし、令德を進め、及び地位を高むるにあり。家政の欄には一家を調理すべき方法を載せ、姫鑑には令德を進むべき佳話、實傳を載せ、雜錄には美術に關する事項或は交際の心得を載せて優美高尙の風を養ふべく、その他時時の要報及び評論を掲くるものあり。

左の諸君ハ此度更に本社の業務を協賛し論文を寄せんことを約諾せられたり。

法學士　一木喜德郎君
文學士　高田早苗君
文學士　辰巳小二郎君
醫學士　竹中成憲君
文學士　岡田良平君
文學士　天野爲之君
　　　　秋山四郎君
　　　　佐野安君
理學士　鮫嶋晋君
理學士　宮崎道正君

右いろは順

いらつめ

女子は男子よりも貞節ならざるべからず。

利あれば必ず害あり實あれば必ず虚ありとは人の常に唱ふる處なれども害中利あり虚中にも亦實あるとは往々世人の忘却する處なり。蓋し物其然るや必ず然る所以の理ありて然るものにして彼の荒誕無稽の傳説といへども其素を尋ね其因を究むれば必ず多少の實説に基かざるはなし竿頭の白衣を認めて幽靈となし棚上の青瓢を以て妖怪となすの類白衣と青瓢とあるあればなり。もし白衣もなく青瓢も無くば懦夫も亦怪を見るなかるべし。凡そ世人の保持せる思想も大抵皆斯の如く最荒唐なる思想と雖も亦多少の眞理を含蓄せざるなし。故に今若し一思想ありて時の古今を論せず地の遠近を問はず人皆之を保持せばかゝる思想の眞理を含蓄する愈確實なりとは西哲某氏の論法にして此論法に據れば女子の男子に節なるは男子の女子に節なるよりも一層大なら

さるべからざるの一事は尊し眞理に近きか。

野蠻蒙昧の時にありては女子は男子の財產なり男子の奴隷なり內にありては食物を調理し衣服を製造し家屋を修繕し外にありては菓實を採收し荷物を運搬し其他の勞働大抵皆女子の務なり。然るに男子は女子を愛するに非らず之を敬するに非らず女子の調理したる食物を食ひ其製造したる衣服を衣而も女子をして餘瀝尙飽く能はず弊衣尙脚を覆ふ能はざらしめ少く己の意に悖る時は直に鞭撻を加へ甚だしきに至ては之を殺傷して毫も顧ることなし之を要するに男子は最大の忠を女子に望み却て最小の忠も之を女子に盡すことなきなり。

之に反して歐洲文明國にありては女子の擅橫男子よりも甚だしく其居るや男子の供養を仰ぎ其行くや男子の扶助を受く女子入れば男子之に席を讓り出れば送りて門に至る。必竟男子は女子の小使たるの觀あり。然れども此奇觀の中に於て野蠻蒙昧の時と同一の一事あり即ち最大の貞節を女子に望み其女子に盡すことは却て之れよりも小なるの一事之れあり。何を以て之を知る、曰く歐洲各國離婚若くは別居の法あり而して女子の離婚を得るの理由は必ず男子

の離婚を得るの理由よりも大ならざるべからざるを以て之を知るなり。之を例せバ英國の法律に妻若し他人と姦通する時ハ其夫容易く之を離婚するを得。然れども夫の他人と私通したるものハ(無夫の女子と通じたるものを云ふ有夫姦ハ別に法あり)若し其妻に對して暴行を加ふるに非れば妻は離婚を請求するを得ざるなりと。是に由て之を觀れは女子の姦通は法律の禁ずる處なりと雖も男子ハ若し穩に姦通を行ふに於てハ法律上毫も制裁を加ふることなきなり。野蠻國と文明國の中間に位する社會に於ても亦た然り。支那の如き貞女兩夫に見へずと教ゆと雖も貞夫兩女を娶らずとは教へず。現に我國の如きも有夫の妻姦通を行へバ法を以て之を罰し夫は之を離婚し人皆其不貞操不品行を責む。然れども有妻の夫私通を行ふも妾を蓄ふるも法律上之を罰することなく人之を見て恬として異まず或は之を以て男の働なりと云ふに至る。

斯く野蠻より文明の社會を歷觀し來れは女子は男子よりも貞節ならざるべからずとは人類の一般に信ずる處なるを見出すなり。之を目して人類の僻執と謂はんか。然れども人類一般に信ずる處なれは一槪に之を僻執と目して顧

ずして可ならんや。此僻執と見ゆる中にも必ず真理の伏するものあらん請ふ余輩をして之を討尋せしめよ。

凡そ物能あり不能あり。猿は木を攀るに長し水虎は水に泳ぐに長ず。若し其長處に於て過失あれバ人の之を責るや其不長所に於るよりも甚たし。猿猴水に溺るゝも人之を悲むのみ。水虎木に攀る能はさるも人之を憐むのみ。猿猴若し木より落ち水虎若し水に流さるれば人之を何とか云はん。夫れ男子の長所は智識なり体力なり。女子の長所は美術なり道徳なり。故に男子若し智識なく体力なく職業を得る能はずして路頭に迷ふ時は人の之を責むるや女子を責るよりも甚たし。女子の乞食は人の憐憫を得。男子の乞食は人の為めに避嫌はるゝ所以蓋し之に依るなり。然れとも美と徳とは男子の長所に非らず故に美を解せさるも人之を異まず徳を缺くも人の之を責むる女子を責むる如く酷ならさるなり。之に反して女子若し其長する所の道徳に於て缺る所あれバ人之を責めて毫も假さゝるなり。彼の花井梅を見よ事に因りて其傭人を謀殺したるなり。謀殺ハ決して希有の事に非らず。毎日の新聞を讀みて謀殺の

話と見るなからんと欲するも極めて難し。然るに彼は斯の如く世人の談柄となり是は其日其日に忘却せらるゝは何ぞや其原因素より一にして足らずと雖も彼れ道徳に長すべき女子にして此事ありて人の之を異む甚たしく之を悪む大なるも亦た其原因の一なり。蓋し貞節は主要なる道徳なり。故に女子若し之を缺く時は人の之を責むる男子の不貞を責むるよりも甚たしきなり。

然れども上に陳述する處は未だ以て充分の説明と為すを得ず。何となれバ女子に貞節を責むるは他の善行を責むるよりも甚たしければなり。蓋し女子の貞節を以て第一の美徳と為すは別に其理由あり。即ち女子の不貞は男子の不貞よりも其害甚たしきこと之なり。凡そ男女の關係の一大眼目は人種を保續するにあり。故に能く此目的を達する關係は善良にして之を達する能はざる關係は不良なり。一夫一妻の法は一夫多妻の法よりも善良なりと云ふは前者は概して人種保續に利にして後者は不利なるか故なり。今女子の不貞と男子の不貞とを比するに前者は後者よりも人種保續に不利なり。請ふ一例を擧て其故を論せん。假に甲の妻乙なるもの丙に通し一子を擧ぐるとせよ。此子は

之を甲の子とせんか果た丙の子とせんか。甲は己の子に非すと爲し。丙も亦た己の子に非ずとせん。然れバ此不幸なる小兒は父の保育を得る能はずして僅に母の手一つに保育せられさるを得ず。随ひて不充分の食を食ひ不充分の衣を衣、身体精神共に充分の發達を爲す能はずして人種保續に不利なる明亮なり。不貞節なる母に生れたる小兒の不幸なる話は余儕の屢耳にする處なり。之に反して乙の夫甲なるもの丙なる一女子に通ずと假定せよ。乙若し子を設くるも丙、子を設くるも父母共に歴々たれは共に力を協せて育兒に従事すると得べし。但し甲の愛を乙丙に分つの不利あれとも其害たる前者に比すれバ少々なり。

以上の理由によりて考ふるときは人類の僻執と見えし「女子は男子よりも貞節ならざるべからず」との説も道理あるが如し。男子の不貞を以て男の働と爲すが如きは女子と以て財產となすの餘習にして余儕務めて此悪思想を驅除せざるべからざるは固よりなりと雖も男子の不貞なるか爲女子も亦不貞にして可なりといふが如き卑劣なる見は自己の地位を高むるに熱心なる女子の懐く

べき處にあらざるなり。女子は貞節の美德ありて始めて其眞正の地位を得べきなり。故に女子にして男子の不貞を尤めて效ふ如きとあらば余儕は女子の地位の永く淪沒し了るを見るのみ。

姫かゞみ

ふくさつゝみ　第三回

美妙齋主人

母親に歌舞伎新報を突付けて芝居を强請ッたり、皇后宮の思召書と暗誦えて父親に洋服の催促を爲る樣な娘御たちにも分解るまいが、裏店住の苦しさも決して容易な事でもない。横町の大時計が正二時を報ける頃にも日の照もまだまだ强くあつて燧函の樣な城廓にも火が附いたやうになり蚤の横槍やら虱の追擊やら、攻道具が澤山になつて來るので、病人も中々ねふられず、床の上で眼を開きながら、破壁を張つてある新聞紙の反古をまじまじと讀んで居ると、母親もまだ傍目も觸らず妾と一途に精一杯、その頃にもまだ價値が有つた籐筒を編んで內職を爲て居た頃の事であつたが、門口の溝板に取次を爲せて「御免下さい」と優

しい聲で音信れて來た人が有つた。見ると、其人も別人でも無く、包の持主の杉野直子であつた。妾の身分が貧乏なのも十分知切つた事だけれど、其處がそれ娘氣で、斯う家へまで尋ねて來られても、一にも心にも弱身がまだ痕方殘して居るので、妾もいよ／＼極りが惡く、手に持つて居た籐筒をも匿して仕舞ひたくあつた、籐筒どころ、この病人が着て居る襤褸夜具までも匿して仕舞ひたくあッた、襤褸夜具どころか、張交の壁までも匿えて仕舞ひたくあつた、それこそ身までも匿して仕舞ひたかつた。其内に先方は早上口に身を現し、妾を見て莞爾笑ひ、そして可愛らしい禮を爲るので、妾も仕方なく、鉾先を母親の方へも向け「阿母さん、あの……先刻の包の……」と言つて母親を味方に引込み、其まゝ下を向いて居ると、母親もとうとう妾の代理公使に爲れて仕舞つて直子に向つて挨拶した。其時の直子の挨拶仕方それも世間の娘たちに見せたい程であつた。年も行かぬが、揖讓の上手なこと、物の言ひやうも落付いて居てそして明亮して居たこと、なかなう尋常でも無かつた。そして物に馴きて居ると見えて、家の中をきよろ／＼と見回しもせず、見苦しい處へも故意と目を向けず、包を還された禮を丁寧に述べ

た末「是ははなはだ失禮ながら」と一圓紙に包んで出し。いくら這方で辭退しても聽入れず、たうとう受納させて仕舞ッた。母親も妾も婦人氣に思はぬ涙を催はしゝ。父親も、男ながら曇聲で禮を述べた。處が直子も、あゝ今思出しても忝いが、直子も情に逼られて眼の中にははや涙が……

倩々と病人の容体を見て居たが、やがて眼を屢叩きながら妾達の方を向き、

「太甚卒爾で厶んますが、御病氣は何で厶います。」

問掛けられて母親も會釋して、

「有難う厶います。矢張り胃病だ相で厶いましたが、只今では如何ですか。」

直子の眉にも不審の皺が現れた、

「それでは只今は……」

「誠に御恥かしう厶いますが、何分にも御覽のとほりの身上で厶いまして御醫者に掛かることも出來ませず……」

それ迄は言ッたが、はや堰上げて來る涙の津浪に母親の言葉の途も忽止まッた。 それを傍で聞いて居る妾の胸……千切れるやうで……錐で刺されるやうで……





我知らず歯の根が踏舞を躍初めて……其癖に血は頭の上へ昇ッた。

「それは御氣の毒な事でムいますねえ……何時ごろから御煩ひでムいます。

母親は僅に息を吹いた、

「もう彼是一年程でムいます。　斯樣な事をまだ御馴染も無い貴孃に申しますのも失禮ではムいますが、御言葉の御深切なのに甘へて申しますなら、もと私どもも只今ほどの貧乏人でもムいませんでしたが、色々不仕合が連きましてため仕方なく……否、もう病氣ゆえ仕方もムいませんが、考へれば考へるほど憎らしいのは前に店に居りました番頭で勝手な事を致じて這方を見限ッた後はとんと鼬の道切でムいます。」

胸にある考は些少でも出口さへ有れバ出やうと爲て居たこと故、母親もつひ迂濶々々と番頭の話まで言出した。　妾が現在の母親の事だから辨護するのでは無いが、是は大抵の人の常で、なるほど淺はかにも違無いが、さて之を分別して押へるのは中々難い物だ。　通例の者なら、(勿論貴婦人だの何のと言ッて居ても、世にも馴れず、心理をも知ッて居ぬものが多いから仕方は無いが)御自身の高尙

な心に引比べて、愚痴ぽい婦人だと卑しめて碌に挨拶を、此樣な處にと爲ないものだが、直子は決して左樣でなくて、さも氣の毒な顔付で、而して、他の話を無に爲まいと思ッたのだらう、心を籠めた体で聞いて居た。けれど妾がつく〴〵感心したのは直子が交際の道に長けて居たことで此樣なむづかしい應答の間には事に由りて相手の心に入るやうに故意と殊更深く問尋ねたり何か爲る進退が有るもので直子も体裁よく其法を行ッて居たけれども、さてまた言惡い返答を出させるやうな問をバ掛けなかッた。是が中々容易に甘く出來るものでは無い。それを直子は巧に行ッて居た。年も行かぬに、本當に感心さ。

餘程談話も濟んだ後、直子は何か屹と思附いた体で容を正し「申す迄ではムいませんが、御藥を召上がらなくては直る病氣も治りません。失禮ではムいますが如何でしやう、妾の方から御藥を上げましやうか。と申して妾が醫者ではムいませんが、親父が醫者でムいますから。もし御否でムいませんならば直に親父に左樣申して診察に參らせませう」

ても深切な人では無いか、貧しいのを見難ねて救さうと言ッて。世に意外な

事は幾許も有るが妾達はまだ是程意外な事をば遂ぞ見たことが無かッた。慈善を爲ては誰でも快くない者も無い。直子も流石に此時は胸の中に言ふに言はれぬ心が動いたので、又も、斯う言ふや否や思はず涙をはろりと落した。さア、それだものを夫を聞きまた夫を見て居る妾たち親子の胸の內それは本當に何とも角とも譬様が無くあッた。母親はこらへかねて……嬉しさに……突然袖を顔に當てゝ、あの父親も涙に咽んだまゝ枕にしがみついて、妾とて何で堪へて居られやうか、ヒイと一聲立てたばかり……實に今斯う言出しても悲しくある。少時の間は四人の間に涙の川が言葉を流して居たが母親はやうやくに啜泣の顔を擡げ、

「御深……御深切……何と御禮を申して、宜いやら。エヽ、モ、貴娘……その御深切なと……此親子三人が……貴娘……手：手：手を合わせて……」と言ッたばかり後は出ない。 直子も僅に眼を拭ッて、

「そんなに仰ッては却ッて痛……入ります。只今だから申しますが、斯ういふ時には一錢の御金でも欲しいのが人情でそのに……御娘御さまの御潔白どうでァ

黙ッて見て居られましやう」是も此儘で後をバ言へなくなッて仕舞ッた。父、親も今は堪兼ねて……たゞ兩手を合せて居て……

まわがれッと　第二回の上

頼みてし頼の綱も切果てゝ主も囚圄の身となりぬ。敵はいよ〳〵力を得て只一揉と這方を指し押來らんず浮評も聞えつ。城にも武士なきにあらず、なれど其勝敵軍にまさるべうもつゆ見えず。城にも根も無きにあらず、なれど數年をさゝふるにたらず。味方の城も根城のみ、敵の味方も日毎に增そめり。打出でゝ直に敵國に入り、主をば救出ださんか。城を捨てざれば夫も叶はじ。楯籠りて必死をきはめ、寄來る敵を迎へんか。主をば終に救得でなば落城の日もあらむ。たゞ頼もしきは城中のもの總べて野心を挾むことなく、忠義一途に凝りたるなれども、さても又「色見えてうつろふものは世の中の人の心の花」とう言ふに、ても頼もしと心緩して頼まれもせぬ頼なり。是をおもひ彼をおもふ「まわがれッと」の心の裡、それ苦しさ如何ぞや。胸狹き人ならば出づべき思案も出でず

して空しく事を過つべきに………
屹と思案を決めつゝ一日若君を召近づけ靜に之に打向ひ、
「若よ和君も稚きながら然りとて思慮なき齢にもあらず。今此母が言ふ事を仇に聞過ぎたまひぞよ。既に傳聞きてもあらむ主は軍に克たせたまはず、敵の手に捕はれて囹圄の中に在せるにぞ今は顧慮せる處も無しと敵はますます力を得近き内に此城に寄來らんといふならずや。翌日にもあれ、其言たがはで寄手を砦の外側に見るなどの事ありなば其時和君は如何にか爲たまふ。思案を聞かまほしけれ。」と
問はれて若君ためらはず、をさなきながらも眼をみはり、
「のたまふまでにも候はず。這回の失敗のくちをしさ、見よ夜に日に齒を切りて………」
「血氣の勇にはこりつゝ齒を切るのみにては甲斐やある。思ふに和君も母と全く及ぶかぎりは穩和なる手段を用ゐて主と國とを必死の中より救ふべく志したるならんめり。さりとて城を阿容々々と敵にわたすは本意ならず、今の

吾儕の思案といふも、やがて寄手の來りなば其處に必死の勇をふるひ、城を守りてしばらく食止め………」

「されど士卒も多からず、糧も少なく味方も無きに………」

「現にそのことよ。まちたまへ。しばらく寄手を食止むる其隙に和君は海を渡り、英國に行きて仔細を語り、救を乞ふて馳歸り………」

「さてはそれより寄手を挾んで………」

「然なり、内外相應じて………されど和君は猶いまだ高きにあらぬ齢なり。かゝる大事の使節とありてよく英國の心を攬り、加勢を乞ふは易きに似てまた易からぬ業になん。是のみ心にかゝれども、思返せば和君とて………」

「烏滸がましうも候へども是とて「もんとふおると」の子「まあがれツと」の若なるを。」と

言ひつゝ母の顏を見ればさも嬉しげなる眼の中に涙の露はさしぐみたり。

かゝりし程に明治元年、八月二十二日、はや官軍は勝利にて若松城に差迫る大砲小砲の響は天地も摧くるばかりにて、五層の櫓も烟に包まれ、今にも城は陥んとす。此時甲斐八郎はみづから教練したる農兵一隊を率ゐつゝ城に赴く途次、母のかね子の方に立寄り、最期の暇を乞ふほどに、かね子は些しもわるびれず、「あッぱれ武士、勇ましや。偖こそ求馬の子なりけれ。偖こそ母の子なりけれ。忠義を忘れて命な偸みそ。後の世までの龜鑑となれ」と諫勵ましたりしにぞ八郎もまた勇立ち、夫より城に赴きて、思ふが儘に奮戰し、終に戰死したりける、年は僅に十四なり。嗚呼八郎幼少の身を以て一隊の新兵に將たるも猶いまだ全藩中にて比類なき名譽なりけるに、殊に其職を全うして花々しくも終りしなどまた其母の教養の素あるを見るに足りぬべし。

事平らぎし後に至りてかね子はみづから八郎の屍を尋ねて葬りて念頃に菩提を吊ふものから後には二女より外無かりき。料らざる殃禍にて夫が死せし其後は憂き年月を送りつゝ、只八郎が生長して舊來の食祿を復すをのみ樂にて辛苦を忍び艱楚に堪へ、一心に教養したりける杖柱の離れしことなれバ、此時の

かね子の愁傷は果たして如何ばかりなるべきか推測られて哀なり。されども剛氣の女丈夫なれば中々に崩折れず、後仝姓原早太の次男なる直次郎を養ひて我子の如く孚みたり。かくて明治三年に至り、舊藩主に從ひて老母と幼女とを連れて陸奥國三戸郡に移轉りたりし程に、其處は寂たる鄙にして、且住馴れぬことなれば活計とすべき事も無く、特に養子直次郎をば修行の爲とて出京せしめし後なれば、兎も角も爲べきやうなく、終に晝は人に雇はれて裁縫洗濯の事を爲し夜は雨雪をも厭はで餅菓子など賣歩行き僅に活計を立たりけり。

かくて明治七年となりし頃養子直次郎も歸來しかばすなはち相携へて函館に移住み、それより後は近傍の幼き女子を呼集めて裁縫を敎へ、それを老後の樂とせり。明治十年九月會取學校に於て其女生徒に始めて裁縫を敎ふることゝなりてかね子はやがて之が敎員に任せられ、俸給二圓五十錢を賜はりたる、是れ函館區内の學校にて女子に裁縫科ををしへし濫觴なり。その後かね子も專裁縫に從事し、ます〱心を勵まし、思を凝らして其業を研究し、その敎授法に於て大に發明するところあり。十一年九月小學敎科傳習所裁縫敎員に轉じ、仝年十

一月職務勉勵の件をもて官より慰勞として金一圓を賜はる。十二年三月月俸金三圓に增給され、全年七月第一公立女學校建ち、その裁縫教師に轉せり。（未完）

家政要錄

家政を整ふるには熟練を要す

といふ題を掲げて讀者のお聽に入れたき事かムります。抑人間の最大の幸福とは如何なる境界を申すとなふは、內は親子兄弟睦じく、家庭に怒罵の聲を絕ち、一家和合の樂を享け、出納度に適ひ、飮食宜きを得衣服淸潔にして器具整ひ家人悉く健康に外は親戚朋友の間柄は申迄もなく、世間の交際滑かにして、人にも愧ぢず心にも愧ぢざることそ、眞の幸福の境界と申すべけれ。かく並べ立て見ますると皆讀者の職分である、イヤハヤ讀者はタイした任を擔ッて居らつしやる御身分でムります。世間の事はつまらぬ事をするにも經驗と熟練が必要ですもの讀者のやうな大きな任を擔つた方々にはなかなか苟且な事ではいけません。一家の政といふうちにも外に對しては交際の事もあり、內も子供を敎育し

家族の間柄を彌縫し家族の健康を司るの事もあり、奴婢を使ふ事もあり升。之を旨く行るにも中々工面工夫の必要な譯で本心になつて行つて見やうとならハ随分仕甲斐のある面白き仕事でもありませんか。たとへバ「いらつめ第三號」に家政記者がお話いたした會計の豫算を立てゝ、豫算通り家政を行つて見るが如き、又も學理に適つた献立を作りて家族の健康に心配し、子供を育つるの道他人に交ハるの道等に、一々工夫を凝すこと恰政治家の政事を執るが如く、理學者の實驗をなすが如く、教育者となり、外交官となるの思ひならしめハアヽ、女子の事業も愉快なるものかな。それに世間ハ「庖厨の事ハ阿嬰や老婢のすることで妾達のすることでない」と高く止つて庖厨の事もつまらぬ事とて蔑視む孃達の儘ありますが、それも無理ハない親達が「庖厨へ來る暇があれば琴でもお淩へなさい」といふ教育ですから呆れて物が言へません。しかし此等ハ畢竟女子の職分を知らぬからのことでありますれバドウか此人達にも女子ハ職分ハ是程大切で是程愉快だといふ譯を聞かせたい。讀者ハ五自身の職分を篤と御存だから讀者にも經驗熟練を積まれんことを勸告いたします。すべて經驗と熟練も目前に

起る事毎に意を留めて其成果を考へたならバ得らるゝものでござります。機會も晝夜間斷なく讀者の目前に現出して讀者の之を捕ふるに任す。之を捕へて考察を下すを誤らずバ熟練を得ると容易なる譯です。

家政記者ハ讀者の帷幄に參謀となり、讀者の實驗室の助手ともなり、機會さへあらハ讀者の爲に五相談に預り又助言もいたしますから讀者折角行つて五覽なさい。序に五披露申します大西龜次郎君ハ献立の事に付き親切なる書を寄せられました讀者には永く必要なる參考となりますれハ大西君に向つてハ其勞を謝し、讀者に向つてハ空々看過せられざらんことを祈る。

かやうなお話をいたしまするとご妙齡の淑女達ハ「家政記者ハいつでも奥樣達への話バかりで妾達の聽くやうなことはチットも話さない」と仰やる方もありませうか、それハ淑女達に似合はぬお小言と申すもの、淑女達が今日セッセと學バるゝことは皆此愉快なる事業を旨く行る下拵でありますれは「學問ハ婦人の本分を全うするが爲に修め玉へ、學問の爲に婦人の本分を忘れ玉ふなかれ」との一言を呈して、今日は是でお仕舞といたしませう。

食物の献立

佐倉分營在勤　大西龜次郎寄送

いらつめ第四號に山家さと子の君より食物の購ひ方に付き書を寄せられたるを見て、拙者も大に御同意にて今聊か食物の献立の事に付き意見を陳て家族の健康を支配せらるゝ婦人方に御相談申すあり。人の健康を平等に維持せんには不斷平等の滋養物を給ひ身体の消費を補はねばならぬとは恰も蒸滊機に定まりたる作業を起さしむるには不斷一定の石炭を焚かねばならぬと同樣なり。たとへば十馬力の蒸滊機ありて之に相當する石炭を燃すときは其機器は力のあらん限り活潑に運轉すべし。されども若し石炭不足するときは其運轉澁滯すべく、若しまた多きに過ぐるときは機鑵は忽ち破裂するなるべし。人の体も同じ道理にて食物の過不足によりて健康を害すると夥し是に於て献立の必要あり。

さて人の健康を保つには何品が必要なりやといふに、蛋白質、脂肪、含水炭素物(澱粉砂糖の類)の三品及鹽類香料是なり鹽類と香料は食物を調理する際加味するものにして食鹽醬油、酢、酒類、芥子、胡椒、茶、珈琲、の類なり是等のものは身体の携

造には左のみ必要にあらざれども滋養物の吸収分配及老廢物れ排泄に必要なるとは恰蒸氣機の摩擦を防ぐに油を用ゐるの必要あると同理なり。

蛋白質、脂肪、含水炭素物の三品は身体の構造と活動に於て緊要不可欠ものにして鹽類香料に比して數等上位を占むるものと知るべし。鹽類香料は其價廉ければ之を用ゐること容易なるも、此三品に至りては價貴くして動もそれは不足を生し易し。さて此三品は人身の健康を保つに幾何量を用ゐて適當なるやを定むること必要ありとす。之を定むること頗難く精密なる學理試驗と經驗とに由らざるべからず。日本人の体格に付きては未確定したるものなし。唯田原良純氏が西洋人の保健食料より体重に付きて推算し慣習を斟酌し、日本人の保健食料を假定せるものあるのみ今之に據るときは日本人中等体格の人にして一日間要する滋養物の量左の如し。

蛋白質　二十四匁　九十六瓦

脂肪　五匁　廿瓦

含水炭素物　百十二匁半　四百五十瓦

日本人は先日々右の量の滋養物を食して過不足なきときは能く高度の健康を保ち得べし。此三品は日常の食物中には必其多少を含めるものなれば日常此

三品を單純に食することも不知不識種々の混合食物中より攝取するに相違なし。若家政を司る婦人方にして此三品に過不足ある如き献立を作るときは或は多血肥滿に過ぎ或は羸瘦蒼白なる人を作り不知不識の間に國家に不幸を來すこと大なるべし。

此三品の量を常に平等ならしむるには献立法に大なる改良を行はざるべからず。先献立は一週間のものを土曜日に製し表に造りて庖厨に貼付くべし土曜日は献立組立の日にして一家族の内重ある人々晩餐すみて談話の時妻君の草せる献立を原案とし各嗜好と滋養とによりて意見を出し多數によりて次の一週間の献立を確定すべし。之を定むるには食物分析表に由りて常に滋養質の分量を基礎とし嗜好を斟酌して定むべし此時一目して其滋養分の多少を判別し易き食物分析表を備ふること必要あり。依て拙者は諸學者の分析せし食品滋養量を百分算とし婦人達の此會議の用に供せんとす。勿論かく一週間內の献立は豫め定め置くも物品乏絕のときは之を變更せざるへからす。然れとも大抵保健食料に相當する滋養量に充たしむるを要す。

此食品分析表にて滋養の量を知るには先一定の献立を記したとへバ其一日中米飯を百匁牛肉四十匁馬鈴薯百五十匁を用ゐるとそれは其割合左の如し。

	米 百匁	庚牛肉 四十匁	馬鈴薯 百五十匁	合計
蛋白質	七匁	八匁	三匁	十八匁
脂肪	一匁弱	一匁二分	一匁弱	三匁
含水炭素物	七十六匁	○	三十匁餘	百○六匁

此献立は蛋白質の不足なると六匁脂肪仝二匁餘含水炭素物六匁許不足せり大豆凡三十匁を加ふべし然らは各保健食料に相當するに至るべし。

凡そ食物は化學分析上に現はるゝ割合に盡く消化吸收せらるゝものにあらず、たとへは肉類の蛋白質は吸收し易く米類荳類の蛋白質は吸收し難きか如し。然れども分析表は其大概を示すものなれバ之を基本として献立を製するも誤少かるべし。

記者白す食物分析表は餘程精密のものにて今回の印刷に間に合ひ兼ね

ましたから次回にも美麗なる別刷といたしお目に掛けます。

講義

經濟學とは如何なる學問なるや。（承前）　文學士　天野爲之述。

乙。これも驚き入りたるお尋かな。今すこしく合點なされなば貴下の駁論の誤れるを覺り給はんに。まづ唯今にては私の申せしことを信じ給ふより外なし、何故なればバ貴下が經濟學の原理を篤と合點なされたる後にならざればバ斯の學問の正しき原理より起る處の利益を示すこと能はざればなり。去のきぞもことふの諸原理は皆一に國民の幸福と純粋なる道德とを進むるものなることとは明にお話し申すことを得るなり。富なるものは他の一般の物品のごとく之を濫用することを得るものなるとは之を拒まず。彼のグリース人ローム人のごときは不正の手段によりて得たる富を不正に使用したるが故に彼の衰微を得るに至りしならん、蓋し彼等の富は皆不正なる手段によりて得たるものにして製造業等の自然に發達したるが爲に得たるものにあらず、實に富が人の幸

福を進め、一の新しき満足を得るに從つてまた一の望を生ずと云ふはひとりこの自然に發達したる製造業によりて得たる富に於てのみ見る所なり。今それ一國の歴史なるものは人民のことに付てよりも寧ろ君主の事に付きて詳しきものなり。故に一國の人民の道德風俗に付きて正しき判斷を下さんには旅人乃報告等によらざるべからず。而して吾人が實際に知る所によれば貧しき社會はこれを富みたる社會に比するに其有様は憫むべく、其風俗は殘虐にして其道德は卑劣なり。

富のみにては一國の幸福を生ずるに充分ならざることはこれ余の十分に容るす所なり唯國の幸福を進むる數多の原因の一なり。抑社會乃幸福なるものは純粹なる宗教と善良なる道德と賢明なる政府と之に加ふるに智識の普及との生ずる結果にして苟も斯る便利なかりせばよしや富ありとも幸福を生ずることを叶はじ。然れどもこれらのことは只折にふれて云ふことを得るものにして、所謂政治學立法學など學に屬するものあり、只々吾人が殊更注意せるものは經濟學即其一枝葉にして特に富なる物品を得之を所有し或は之を使用す

ることに付きて社會の幸福を進むるの手段を論ずるものなり。さて貴下には彼の勞働社會のものはこきふの物品を所有せりと考へ賜ふか、もしいまだしと考へ賜ふに於ては如何にして之を進むべきかを詮索するは正しく吾人の義務にあらずや。 如何となれば社會一般の富を増すにあらざれば能く下等社會の有様を進むること能はざればなり。 之に加ふるに貧の極は必らず罪に陷いるものなればなり。 たとへば盜賊の最行はるゝは饑饉災厄の時より甚しきとなきがごとし、故に下等社會に於て富の増進は其道德を高むるものにして兼ては其身体上の快樂を増すものなることを知るなり。 去れば經濟學は賤しき感情を奨むるものにあらずして國家の繁榮を得るの最安全なる手段と平和安全及び正直にあることを示し、國民の猜忌は倘ほ一箇人間に於けるがごとく有害なることを示し、以て不正なる野心を制抑ゆるものなり。 要之經濟學と特に猜忌害毒など云へる情には害を爲すものと知るべし。

然れども貴下は富と云へる字義に付きて誤解せらるゝものあるやに思はる。

抑貴下の云ふ所の富なるものは何ぞや。

甲。富者になるとは大なる收入を得ると云ふに外ならず、他人よりは多額を使用するに適せるものを云ふならん。

乙。貴下の云はるゝ所のものは一箇人の富にして、則ち比較的の富なり。然れども一社會の一部に於ける富者も他に行きてはまた富者ならざることあり。これは私がお尋ね申せし定義にはあらず。一般に富と云ふことに付きて何を理解し爲すや、抑また富とは何物より成るや。

甲。アヽ解りましたなあなたは金錢のことを意味せらるゝか。左れバ私は答へて富とは金と銀より成ると云はん。

乙。金錢の外何物もなき社會の有樣如何を考へ給へ。ロビンソンクルーソーが荒果てたる孤島に在りし日に於て其金にて充てる袋が何等の價直を有せしかを思出し賜へ。

甲。何如にも、しかし荒れざる島なれバ金錢にて己のが欲するものを購ひ得るにあらずや。

（未完）

雜錄

忘よなんだなく
「いと有難きおふせでと、
然はわれとも家父家母、
及來るは是非も無し。
親子かくまで壯健に
さる憂目をバ毫知らず
琴にこゝろを樂しめつ、
見ぬ世の人を友どちと
恩愛二つ、胸ひとつ。
何うれはしく侍るべき。
嘲りたりと宣へど、
あらざれバ社歸りても
更に憂しとし思むねバ
かならず思賜ひぞよ。

（貧居の場 承前）
父母あらで然までに
國にたゝかひ止まざれバ
縱哉及びも來らずに、
打擲はずバ夫こそは
晝間は野邊の同調に
夜としあれバ父母の
ナスびの色の最も濃く、
三幅の衣ぬひかへて
昨日其邊のむすめこが
そは那の人の癖にして、
其等は聞えざりしあれ。
唯此後もさる事を…
慰過ぐして御身にも

誰かは深くおぼすべき。
其差しひゞき下にまで
家は貧しくあくもあれ、
まことゝ憂目に侍るめれ、
奏和するまつかせの
傍にありて此の如く
水も入らねバ薄からぬ
去歳に此年と衣れバ迚
物言ひたるを憫し、
心有りての言葉には
されバ妾は斯るをも
嘸家尊大人、嘸母上…
障らせ賜ふ事あらバ

それこそ心憂く侍れ。
わざと匿して慰むる
「かくは言ふとも少女也。
慰諭言をユフ月夜。
望月夜にも得足らぬに、
奥し思へばいぢらし。」と
亦悲しくもあるを現に

喃、家尊大人は丶上。」と
胸のさかしさ、愛らしさ
さてこそも衣をホシ月夜。
まだ年頃は新づきに、
朧月夜のうめが香の
憐むばかり、さすがにも
世の人親の常にあむ。

昨日嘲られしをさへ
見ればみる程、親ごゝろ、
色にも見せで健氣にも
いざよひ月夜にもあらず、
いと香ばしき心根の
慰められてうれしくも

（完）

博雅三位

空こそ晴るれ、こゝろは晴れじ。
秋の露みてよしきを着るに
我身ばかりはキばえも無きは
ちからよわきに因りつるものと

いつも空しくふちカヘルでも
わが身ばかりはキばえも無きは
矢竹ごゝろの弓はりづきの
見ればおもへば浦山しきは

見れば思へばうら山しきは
あたり隈なしくまナよ竹の
まがき吹越すよかせよつれて
扨も今宵のめでたきつきよ
浮かれたまふよ、あらなつかしや。
二 朧のを。だまき夜ごとよクルを
を。ことばかりよみそなもするか、
されバこそあれ四のを。のみち、

空のつきかげ、かげよく冴えて、
まがき吹越すよかせよつれて、
すはやひゃくよその一声らべ。
うかれ給ふよ、あら懐かしや。
身をバ妻こふを。じかとなして
三 を。ことばかりよみそなはするか。
四 を。ばなあらねど招きたまふか。
されバこそあれ、四の緒の道。

服装のこと

伊達屋のあるじ。

ドーラン博士嘗て云はれたることあり、人間は己よ必要なる衣服を備へべし

て生るゝ動物あり、植物は自ら死して人をまもり、動物は其皮を供へて萬物の長たる人類に衣服を充つ」と。實にも其の通り、草木も生れながらにして皮もてつつまれ、鳥獸も生れながらにして羽毛の衣服を着くれども、獨り人間に至りては裸体にて生まるゝことなれバ綿を造り蠶を養ひて衣服の料を求めざるべからざるや今更に云ふまでもなし。服装のことは人々にとりては誠に大切なることにして人々よろしく心を用ふべきことなり。しかれども其大切なる點に付きては家政記者の見込もあるべけれバこゝには唯手短に何様なる衣服が似合しきやにつきて一言申し述べん。

今頃の年少のいらつめの方々の内には華美なる服装をさへすれバそれにて己のが容貌が貴くなるやうに考へ給ふかたもあるよしにて折には「時好の衣服を求めて得させ賜へ」など父母の方にせまらるゝよし風の便に承りぬ。これは甚だしき誤なり、古賢の語にも「人の品格は其衣服の實質より生ずるものにあらずして却て其作法ぶりより生ずるものなり」と云はれたるにあらずや。されば人の何となく優にしてしかも氣高く見ゆるは其價貴き衣服を穿てるが故にあ

らずして唯恰好のものを程よく装ひたるより斯も見ゆるものと知り賜へ。巧みに装ふたる人と下手に装ふたる人とは他人の交際に於て相手の待遇に著しき異ひあることは人の誰しも知る所、必竟するに其人の利發なるや物事に疎き人なるやは其服装の様にて察せらるゝものなればなり。人々の華美虚飾を好むは元より種々のことあるべけれども大方は他人より讃められんとの心より出づることならん、然かれども徒に虚飾に走れば心ある人には疎んぜられ、尋常の人には互の嫉みより悪しざまに云はるゝこと世の常なり。左ればとて服装のことは繕ひ賜ふなと云ふにはあらず、人間の花、美の本体とも云ふる、淑女の方々なれば其は云ふまでも方々の心を盡して服装を繕ひ賜へ、他人よりは優にして氣高く見ゆる様に心を盡して服装を繕ひ賜へ、婦人の品位の大半は其服装より生ずるものなることを忘れ賜ふべからず、ゆめゆめ華美虚飾に走りて天稟の美を毀ち、交際仲間に於て己の名誉を損はぬ様に心し賜へ。然かれども斯る六かしき注文通りに服装を繕ふことはもとより容易き業にはあらず、其は主人も思案なきにもあらじ、また次の號にてかさねて見参いらす時にゆづらん。

人間腹中の蟲。

醫學士　竹中成憲講述

今日は人間の体内に寄生をして居る蟲のお話をなすべし。此蟲の種類は隨分澤山ありますが、其中多く見受くるものは六種あり。先第一は蛔虫で其形ちは蚯蚓の如く大さは一尺計にして雌雄の別ありて雄は雌より小くして尾曲りて鈎を具へり。其色は白きものと赤きを帶びたるものとあり。大抵の人の腹中には此寄生蟲あり。殊に大人よりは小兒に多く、男子よりは女子に多し。又狂人の腹中に多く寄生する者にて矢張卵より孚化るなり。一匹にて六千万の卵を生むといふ。卵は体内にて孚化るにあらず。大便に混じて出でたる卵体外にて孚化り稍生長したるもの掃除の行屆かぬ野菜類に混して人体中に入り其生長を遂ぐるなり。世間には甘きものを食へば蛔虫を生すといへど大なる誤なり。但し甘きもの(小豆)を食へは自然に通じをよくするが爲め腹中の蛔虫を逐出すなり。日本人には此寄生蟲格別に多く百人を解剖すれば九十九人まで

此蟲を發見す。此蟲群をなして寄生するを常とす一人にして一日の中に午前に百三四午后に二十二匹合せて百二十五匹吐き出したる例あり。又一人の腹中に五千百二十六匹居りたることもあり。此蟲通例は腸部に在り又上りて胃に入込むものもあり。尚上りて口より出て或は鼻より出ることあり。夜中など咳と共に飛出すとあるは氣管に入りたる場合なり。腹中に此寄生虫かあれはとて左程の害はあらざれども數多く生するときは食慾を減し或は過食ならしめ腹痛癲癇或は驚風に似たる諸症を起すことあり。されども此等の諸症の徴候あるも最初より蛔虫の爲なりとの鑑定は醫者とても付かぬなり。大便と混し或は口より蛔虫の出てたる後其原因を知るまでなり。但し小兒の眼瞼青くなり鼻痒くなりて指にて鼻孔をいぢるは蛔虫の生きゐる徴候となることあれは母親は等閑になさず速に醫師の療治を乞ふべし。

次には絛虫で其種類も澤山あれどおもなるは三種あり是は蛔虫の如く誰にも居るといふ譯でなく其形は眞田紐に似たるを以てサナダムシとはよくも名けたり。頭は甚小く、トメバリの頭の如し尾に至るにしたがひて次第に太く全

体節々より成る虫の長さ短きも二丈長きは三丈二三尺に至るもあり其節々の數四千に至るものあり毎節々に生殖器を具へ其中は卵を以て充てり。 三種類は重に頭の形によりて異なるあり頭部に吸盤あるもの(章魚の疣の如きもの)ありて采の目の如く相並び之を以て腸管に結付き居るあり 此虫も亦体中にて直に孚化らす大便と共に出てさる卵は牛の食ふ處となり其血液中に混しそれより筋肉中にて豌豆より小さき位まで生長しそれより人の体中に入りて生長を全うするなり。 他の種のものは頭部の吸盤の外に二列に並びさる鉤ありて之を以て腸管に緊着くなり此種の卵は豚の筋肉中に發達をなす。 又他の種のものは吸盤の仕掛異れり。 此種の卵は魚の肉中に生長す。 生鮭には居るかもしれず故に牛豚鮭の生肉を食するときは寄生虫を宿す恐あれは必す煮熟して之を食ふべし煮熟すべき熱度には虫は悉く死するか故なり。 絛虫は蛔虫と異にして大抵一匹宛寄生するを常とせり。 併し一人の腸中に絛虫十二匹のみならず四十一匹居たるとあり。 又男子よりは女子に於て多く其害は蛔虫よりも烈し食欲の進むものの減とずるものとあり顔色憔悴し目眩み頭涔々と痛む等の事あ

り然れども其爲に死する事はなし。 三十年間も体中に止まりて去らざるものあり。 大便と共に出るには數節一聯となるあり一節出つるとあり。 頭部は醫藥の外出づると稱あり此節のちぎれて出るは春秋に於て多しとぞ。
次には馬車の鞭の如き形ある鞭虫と名くる虫あり頭は其細き部分に在り此虫は害をなさゞるなり。
次は白き小さき虫なり矢張雄雌ありて腸内に澤山生活ぞ。 此虫は中々大害をなすものにして婦女子には別して氣を附くべきものなれば他日再び別に仔細に申述べし

叢話

バルザー嬢の譚

城西處士譯

後にはマダムダルブレーとて世に知られたるバルザー嬢は、十七歳のとき「エべりナ」を名けたる小説を著し、其父に告げずして之を出版したる間もなく、父は用向ありて都府に赴き、何か家苞にとて其時最評判高き小説「エべりナ」を買ひ

求め、用向の濟みたる後、チェシントンなる友人クリスプ君の家に立寄りたり。此時バルチー嬢の家族も打揃ひて恰も此家に來訪し居たりしかば、皆々出迎へて「今日は何か珍敷事が厶りましたか」と問ひ掛くれば「別段何もないが此土産にした小説は大層すぐれた作ださうだ」と件の小説を取出だせば、皆々我勝に其書を見て表題を讀みしが、座に居合せたるバルチー嬢は事の不意に出てたるに驚き思はずも雙頰に時ならぬ紅葉を散らし喜憂に心亂れたる風情にて人に知られまじとて顏を背け居たり。平常無事に暮せし田舍住居に偶の來客なれば何くれとなく親切に立働き取込みたる最中にて誰しも嬢か斯く惱める樣に心付くものとてあらざりき。晝餐終りたる後、クリスプ君は彼の小説を讀むべしと申出でたれば直に取出だして讀始めたり。解しがたき所は互に敎へなどして一段一段に喝采の聲は座を動かし、如何にも世間に評判高き筈なりとて感歎さぬものなかりき。温和なる小說の著者は、此時まで辛くも胸一杯の喜と心配を持ちこらへたるが、たまらず堰くる淚を袖に包み、父の傍に依りすがりて「妾が實は其書の作者で」と打萎れていひ出でければ、一座の面々驚かざるはなく、殊に嬢が

姉妹と父との喜は如何計ありしか譬ふるに物なかるべし。父君は豫て孃が天稟の才比類稀なるを認めたりとは云へ、かゝる老練なる事物の觀察力と判斷力と富贍なる想像力と、かゝる巧妙なる詞藻は、ヨモヤ機巧もなく經驗もなく深窓に垂を籠めて、世間の事物を見し事もなき十七歳の一少女より出でしとは思はざりき。

あどけなき少女

ある家にて祖母の延生日とて種々の料理を設け、親戚朋友を招きて饗應し、酒酣なる頃に至りて祖母の嫁は祖母の孫娘に向ひ、「坊や、今日は祖母さんの延生日だから此後とも祖母さんが長生する樣に御前も神さまへ御祈りよ」といへば孫娘は頭を掉ッて、「妾は否……そんな事を言ッて祈るのは」「おや、坊は何う爲さの、それでハ御前は祖母さんが長生を爲さるのを嫌ふのかね。」

時に孫娘は平氣な顔で、「でも祖母さんが最う長生を爲さッて居るのに、またまた長生を祈るのは無理だワ。妾は是から祖母さんが若くなる樣に祈らうと

思ふのだよ。」

善悪の肢。湘煙女史、中島俊子著、女學雜誌社出版。一本を寄せらるゝ僅に怱忙取りく之を讀下しゝに忽ち一個の疑惑起きり。書中には正確に湘煙女史著、とあるにも拘らず、巻中の事實人物をべくの有名なる英國の小説家ロルド、リットン翁の作「ユージーン、アラム」と全く相同しきはそこぶる奇なる事實にあらずや。「善悪の肢」の「深山翁翠」は「ユージーン、アラム」の「ローランド、レスター」なり。「善悪の肢」の「琴路」は「ユージーン、アラム」の「マデライン」なり。「善悪の肢」の「小桃」は「ユージーン、アラム」の「エリヌル」なり。前者の「星之助」は後者の「ジ、オフレイ、レスター」、而して前者の「撫松庵」は實に後者の「ユージーン、アラム」。前者開巻の僻村は正に後者大序の田家なり。前者結末の慘劇は實に後者團圓の悲話なり。琴路が撫松庵を慕ひ、小桃が唯一を愛すは確に「マデライン」が「アラム」を思ひ「エリノル」が「ウ、ヲートター」を最貴とするに更に殊なる處なし。其他哲學上の議論の如き、名士胸中

の情懷の如き、徹頭徹尾、終始本末、すべて「アイデンチカル、イク、ユーシ、ヨン」ならざるはなし。是をはた自然の暗合か。片言隻句の詩歌一二段の短文ならばいざ知らず、かく長やかなる一小説の全部暗合するといふは決して信ずべきにあらず。然るを本書には「著」とありて「譯」といふ字は一個も見えず。

かく言へば反對者はかならず言はん「そは事々しき評論なり。外國小説の事實を取りて之を日本に宛行ひ、而して之を自己の作となし、または自己の著と為すもの、遠くは馬琴の俠客傳、近くは圓朝子の牡丹燈籠又は英國孝子の傳など……見ずや俠客傳の如きは支那小説なる好逑傳の直譯にてそれより筋を取りしにあらずや。湘煙女史の善惡の岐に於ける、之と仝じ例にして、それを以て白玉に斑點を加ふる如きは君子の為ざる處なり。」と　されども論者が基礎とする俠客傳などの如きは無論擧むべきものにあらず、否嫌ふべきことにして、他人が立てし筋を取り、他人が加へし肉を偷みて而して其由を言はざるこそ君子の為ざる處にあらずや。取りしならば取りしと言ひ偷みしならば偷みしと明亮に記してこそ却りて其脱体の工合を愛づる心も起らめ之を秘めて言はざるは却りて讀

者に不快を與ふる原因を作るものなり。

以上述べたる處によりて吾儕も善惡の岐を以て中島俊子の著と見るあたはず之を譯書といふの外なし。故に是より評する處はたゞ其心構にて言ふのみ、敢て著書として評するに非ず。

行文も拙の拙なり。徒に詩句めいたる句を用ゐて而も其中に文なきはむしろ事實の興味をさへに殺すが如き失策なり。試に第一ページの文句を引きて例を擧げんに(假名も原文の儘。以下同じ)「破窓に洩るゝ月影に枕を高く臥しまろぶ心の中の涼しさ。。。は云々」とある「涼しき」は用を爲さず。第六ページに「雲鬟は鬅鬙として雨後新緑の萌出る如く、華顏雪よりも白く、眼涼しくして唇紅ひ、双眉新月を描き、皓齒眞珠を列るに異ならず」とある、文も香も無きにあらずや。其他雅俗折衷の鹽梅の極めて醜き、例へば第二ページに「時にぞありしが、」第三ページに「心配こそ爲し居りけり」とあるなど數盡くすに遑あらず。

其他西洋の事實を我國の事實に改めたる處に於て聊か面白からぬ處無きにあらずといへども諄々しければ之を言はず。兎にも角にも此書を以て此頃世

に輩出する雜小說に比較すれば、さして惡しゝといふべからず。　吾儕〱が此書に關して稱すべきは只是のみ。

然りといへども實に巾幗の身を以て、譯書にもあれ何にもあれ、終に一部を完成せられしこと最愛でたきことにして明治の文壇に記憶すべき一事ならん。これもふに女史が此著ある其材料を擇みし處につきて之を推すも、此儘にして毀譽のため小說の筆を拋ち全く作るところ無きが如きも萬有るへからざることとなり。　女史も鉄中錚々の令名を傳へたる人なり。　すなはち日本の姉妹たちの木鐸となるべきは記者が竊に期する處否ひとり記者のみならず大方の紳士貴女がひとしく期する處なれば、此小跌敗に挫かれず、猶妄評を加へし老婆心を酌みて進むことあらんこそ此滿腔の誠を捧げて敢て希ふ處なれ。

雅語綴字例。　文學士辰巳小次郎氏著、哲學書院發行懸車堂印刷。　和文を學ぶ淑女の爲にも此書の如き頗有益なるものなれバ爰に簡單なる評を挾みて世の注意を惹かんと欲す。　本書開卷なる黒川眞賴大人及び文學士棚橋一郎氏の序

は強ひて言はゞ蛇足なり。著者の自序はいと愛でたし。殊に雅語の性質を定められし說の如きはもつとも價値あるものなり。基俊長親が所論を破りたる處は痛快にして面白し。音韻の說に於て確に區別したる仝聲の字を加へられたるは甚好けれども猶其上に加ふべき音聲の數いと多きを添へられざりしは遺憾なり。次にいろは歌を載せられざるは何のためなりや其子細を知るに由なし。頭字の用法など敬ふるためとも見えざれど事々しく之を記そはその甲斐とてもあるべからず。五十音の意義を精細に明亮に說かれたるは最も妙なり。但し例の擧樣はいまだ精致といふべからず。音の位置の說の如きも耳新らしき物にはあらねど其說方の明亮なる殊に初學に大益あらん。音の變轉の說また仝樣なり。たゞ「繊」を「志は siha」とせられしはそも〳〵何に因りたるにや。萬葉集にも和名抄にも「志和」とありて「志波」とは無し。「い」「ゐ」「え」「ゑ」の區別ありがたし。未審の物數十語あり。其屬處は懸賞を以て問はる。

寄書

此欄に載する所は本社其責に任せず

女學雜誌第八十四號を讀で感を述ぶ。

青葦園主人

人誰か物にふれ事に當て感なからんや。人により只其實を異にし其證を同うせざるのみ。主人常に女學に關する雜誌を讀み面白とか不感心とか嬉さか苦ざしいさか多少の感を惹起さゝるはなし。而今回女學雜誌八十四號を讀で惹起したる感ドは殊に主人をして業を奪なれぶり欝を胸中を吐露せしむるに至れり。元來古語に「前に出るものハ前に歸る」とあれば女學雜誌より起りたる感は女學雜誌社に擲ぎ込むこそ至當なれと存ぜたれども聊か考ふる所ありて貴社に投ぜり貴社餘白を惜む勿くんば幸甚。

「人は唯死するがために生れしのみ。吾人此世に生存するは唯死をるがための手段にして死するこそ吾人の目的なれ。去ればば吾人一日も早く此目的を達せざる可らず。而して吾人此目的を達をるの朝否夕に過へは勉て吾人が目的を達したる事を世に明かす可し。但此て常に異なる目的の達し樣を揮まざる可らず」との説あり。如何にも冷淡なる哲學士めきたる口調を帶び世の所謂死する手段のために鐵銀一日を延すものを嘲り下けすむが如し主人ハ此アツケなき説の世人に容れらるゝや否を知らずと雖も退て世人の行爲の跡に付て其狀を察すれば世人の中には此説を實賤し啻に賛成するのみならず既に實行したるあり。今や實行しつゝあるあり。將に實行せんとするものあり。嗚呼死ハ如何なる形に處て來るとも實に恐ろしきものなりと主人は想像しつるに世の人は只管之を望む者の如く然り。主人は之を許して奇異なりと謂ハんか不思議なりと謂はんか抑も奇異奇的烈なりとハ此等の事を謂ふか。主人此感想を抱くや久しく殊に或種類の女性に於て此感想や較大の價きを有せり。去れば女學雜誌八十四號「木村鐙子の肖像」を見「木村秀子の履歴」を讀み主人の此感想ハ更に活潑の度を增し且益根を深うせり。蓋し木村秀子なる人も其履歴を同うし其運命を同うし孟該屢々女學に關する雜誌に其英名を稱へられたる者。其他主人の聞知し、或は親しく交れるもの皆木村秀子たる名と俱に有しく主人の胸中に再來再出したればなり。只主人は彼等過半のものと交際を結ばず從て其容貌骨格等は悄微主人の脳裡に存留せずして彼らの履歴と運命のみ我脳裡頭をなし主人が脳裡を占有せり。而して今回嗚呼かましくも主人をして貴社の餘白を汚すに至らしめたるハ實に此二者にあり。則此二者の關係を延て以て一般殊に或種類の女子の事柄に論及するならんとするなり。

凡そ事物ハＡＢＸＹと互に其名を異にする丈多少性質の異なる所あり。　既に性質の異なる所あれば其趣く所も自然に異ならざる可らざるは當然の數にして「萬物萬異、萬異相資、而不混同、然後天下之用通矣」然れば物の性質なるものは萬業の基本にして之を導き成さしむる所の主成分なり。苟にも其天然の美を賊す勉めて之を助長せざる可らざるは言を俟たざる可し。　而之を賊せず之を助長するの法如何。　主人を以て見れば勉めて彼等の美を彼此相混せしめず形體上精神上判然と其相互の區別を立たしむるを要す。　自他の區別にして愈明かなれば愈自他相異の點も明かさなり、自他相異の點明かなれば相異の質が各適當なる範圍内に立ち充分なる力を以て自由に其趣く所に趨くを得べければなり。　假へば玆にＡとＢあり形体上精神上各其天質を異にせば始より全然其區別を立て兩性が將來趨くべき境遇の異なるを眼中に置きて應に然るべきの助成をなも可し。　則若しＡは天性推理力に富み、Ｂハ感覺力に富まば之を助成するに於て常にＢにハ較大に推理力に訴へ、Ｂには較大に感覺力に訴へ益々其長所所謂相異の質を涵養し以てＡＢ相異の質が趣く所の本分を盡さしむ可し、又Ａは骨格長大心氣剛勇なれば益々其剛を強す可く、Ｂハ之に反して軟弱短小ならば益々其柔を養ふ可し。　而して愛に注意すべき事ハ剛を強うし柔を養ハんと欲せば其任にあるものは己れ自ら剛ならざる可らず柔ならざる可らず。　然れども一人にして剛なり柔なるハ能ハざる所なればＢ性を助成するにハＢ性の助成者を要しＡ性を助成するにはＡ性のものを要するの必要を見る。　之を要するにＡハ眞にＡらしくＢハ眞にＢらしく判然其區別を立て以て其天然の美を喚發すべし、之を喚發するにハ根基よりＡにハＡを以て之に臨し一切Ａの鑄型に入れて他を望ましむ可らず。　Ｂ亦然り、今日或種類の仲間に流行する所の現象なるＡにしてＢらしくＡらしき、ＢにしてＡらしくＢらしきは主人の最も望まざる所なり否厭忌する所なり。　蓋し人の力は果敢なきものにして己れの本分を盡すさへ中々容易の業ならざるにＡにしてＢらしくＡらしき、ＢにしてＡらしくＢらしきは抑も己れが本分を蔑しろにするものにして俗に謂ふ「出過たる所業」決して賛む可きにあらず。　惟ふにＡ＝Ａ，Ｂ＝Ｂこそ吾人眞成の目的なる可れども吾人全智全能なる身にあらざれはＡはＡらしくＢハＢらしくして此世を渡らハ翼くは罪なきに庶幾く追てＢにしてＡらしくＢらしきは天性の常に然る可らざる事を主人は信すればなり。　然るに或論者ハＡＢＸＹにして既に其天性を異にする以上は如何に彼此相混ト雖もるとも其結果に至り

ては自らＡＢＸＹの性之に即し各自好結果を得べし、必ずしもＡＢＸＹの別を立るを要せず否立ざる方却てＡＢＸＹ各一方に偏するの弊を除くの益さへありと主張す。之を極端に評せハ眼中黒白なく萬物を一物視し彼ＡＢＸＹの別あるハ天下の用通するの基たる所以を忘るる者の如し。主人此説を按するに成程論者の謂ふ如くＡＢＡＹが其性質を互に異にする以上ハ彼等の特性は始終埋滅するなく必らず多少其結果に即出するは爭ふべきに非ず。然れども論者の謂ふ所ハ彼天然の美を苟も賊ハず勉めて之を助長するの精神に背反するを奈何せん。比重硬度の異なる金石若干を一桶内に投し之を攪拌すれは金石ハ多少天然の美を損する事なきか。性質相異なるＡＢＸＹを雜處せしむるは此慨かハしき例に類するにあらずや。又性質温柔なる動物と勇猛なる動物に同量同質の食物を與へて一檻内に雜居せしむ、若し其食物にして一に適するものならば他ハ病を發し或ハ死する事を免かる可きか。性質相異なるＡＢＸＹを雜處せしむるは此悲しき例に當るにあらずや。ヨシ假りに一歩を讓てＡＢＸＹを雜居せしめて斯かる害なしとするもＡＢＸＹ各自其性質の異なる所を究め其異に隨て之を助長するの一層良結果を得るの優れるに若かず。這ハ論者の許も所なる可し。然らハ則ＡＢＸＹ天然の美を全うせしめ其趣く所に任せんと欲せば彼等を別々になし生活上殊に必要なる道具あらはＡに應しＢに應し夫々之を作り之を備へ勉て其區別を嚴にするの必要を見ざらんとするも得べからざるなり。是に至て退て現今我邦女子教育如何を觀察するに左の諸疑問を得たり而此數條の疑問ハ如何なる性質のものか主人は敢て斷言するを好まず讀者の判斷に任す。（第一）現今小學校に於て男女兒全然教育を異にするか（成長後の諸勢力は其時餓に發するものにあらず。幼時より積集するものなれば苟も純粹なる男女を成さんとせば其根基より特異の方を施さざる可らざるものなるを記せよ）。（第二）所謂女學校にして教授の任にあるものは生徒に教授するに方て已れ先づ同情同感を喚起するの人のみなるか（男教師過半を占るを記せよ）。（第三）此過半を占むる所の男教師ハ已に慣れたる推理力を亂用せざるか（女子は推理力に富まざるを記せよ）。又所謂女教師なるものハ女に於て男らしく女らしからざるか（世間の評論を記せよ）。之に從ふ女生徒なるものも同樣ならざるか（教師の特性ハ生徒の身体上精神上に即するを記せよ及世間の評論を記せよ）。（第四）彼ＡＢＸＹ雜居論を主張するものは女性其人ならざるか（男も女も同等同權なりと逆眉立る女權者流あるを記せよ）。（第五）羊の身を以て虎の仲間

に入り爲に其命を落し已れが本分を盡さゞるもの女性にあらざるか(女學雜誌などに盛に稱へらるゝ所謂女丈夫の履歴を記せよ)

嗚呼「女子專門學校教頭木村秀子忽焉永逝を……今再び如此き不幸の音を報を遣恨無限なり。」主人未曾て木村秀子其人あるを聞かず。女學雜誌第八拾四號木村秀子の履歴」の七字ハ主人をして始て木村秀子其人あるを知らしめ之と殆ご同時に又其人ありたりしを悟らしめたり。而「木村秀子の履歴」ハ兼て主人の懐抱せる所を新らしくし併て吐露せしむる事如此。去れハ主人ハ木村秀子其人に向ては主人に「木村秀子の履歴」を讀ましめたる顔回的の不幸短命を悲んで止まざれども「木村秀子の履歴」てふ木村秀子其物に向てハ早く世間に出現せられたるを自他のために喜び聊か謝辭を陳べて祝意を表せざる可らざるなり。依て今再び木村秀子の履歴を按ずるに「秀女天質豪邁不覊頗る進取の氣象に富む男子に凌駕するの勢ひあり言容温雅學を好み文を善くし」夙夜孳々螢雪の苦を嘗む未だ曾て輕羅身を纒ひ紛脂面を粧ふ事をなさず」以て其學事に鋭意なりしを知る可し。然るに哀哉嗜好必ずしも其主人に忠ならず。「月に叢雲花に嵐」秀子の學に鋭意なるの一事は誤て秀子を斃すに至れり。蓋し「虎穴に入らざれば虎子を得ず秀子妙齡の弱性を以て虎穴に入る「秀子が心膽鐵石の如きも嗚呼豈寸斷せざらんや」久しからずして「神氣甚だ倦怠するを覺ゆ」既にして「疾甚だ篤く」殆んご虎子を得んとして虎子に斃さる「亦以て秀子の志操を知るに足るべきなり」而秀子令妹を「膝邊に招き遺志を繼ぐべきを委囑せり」是に於て主人ハ老婆心切、秀子が令妹(廣く意味を)に委囑せられたる遺志ハ委囑せられたる人に秀子と同し樣な「木村秀子を履歴」に崇らしめざるかを杞憂せざるを得ず。而杞憂の極ハ主人をして主人が業論を議論的でなく談論的に繰返さしむるに至れり。曰く何處迄もAハAらしくBハBらしくさせよ。BにしてAらしくBらしきハBたる者の本分を誤まるなきか本分を誤るハ人たる者の屑しとせざる所ぞ。ヨシ假りにBにしてAらしくBらしきハBたる者の本分を誤らずとするも今日文明の世AハA BハB專ら其天性の率ふる所に從ふてこそ分業の實を得。又AとBなる名の異なる物を造りたる造物主の意に適ふべけれ且夫BにしてAらしくBらしからんと欲せば勢ひ已れが性に適せざる事を勉め行ハざる可らず。其良好結果を得べからざるハ素より當然の事と謂ふべく或ハ啻に良好結果を得べからざるのみならず、ために我本分を行ふ能ハざるに至る。果して然らば天下の罪恐くハこれより大なるハあらじ。主人ハ天性を重んず我天性に適せざる事ハ他の之に適するも

のに終れ、已れ A なれど何處迄も A らしく此世を渡らん。 苟も A にして B らしくらしきを望まず。 A にして天性推理的力に富まば推理的職業を執り B にして感覺的力に富まば感情的職業を執り相倶に俟て天下の用を辨せんと欲するのみ。 之を約言すればハ「瓜の蔓に茄子ハ生らぬ」もの天下の瓜たるものハ瓜らしく益其瓜たる所以を高うする事を務め苟にも茄子たらんを學んで破瓜の身となる勿れ「生命ありての物種」ぞ。

嗚呼學を好み文を善くし邁進不羈頗る進取の氣象に富み常に人に談して我國女子の風俗委靡振ハず……今にして女子社會の改良を計らずんば將た何の日か國權の美果を見んと慨然として自ら其奬勵者たらん事を誓ふもの頻々吾人の耳に上れとも暫時にして彼等の何某の履歴なる文字を吾人の眼球に映せしむるハ豈遺恨無限ならずや。 然れとも彼等ハ何が故に此悲むべき望みなき幽冥鄕に急行するや彼等の履歴ハ直に彼等の運命の當に然るべきを告白するならん。 否彼等の履歴の跡に付て察すれハ彼等ハ一日も早く我身にして我意に從ハざる寂寞鄕、我身我意皆虛無なる幽冥鄕に遊ハんとする者の如し。 果して然らハ彼等が世に出る彼暫時にして何某の履歴なる文字を吾人の眼球に映せしむるハ敢て怪むる足らず。 從て彼冷淡なる哲學者めきたる口調を弄ふ者のあるも敢て怪むに足らざるなり。 蓋し彼哲學家めきたる言ハ A = B なる材料を擴けて $A^2 + 2AB + B^2$ に變形したるのみ。 決して其形なきにあらず、 形あるハ「幽靈」にあらされハなり。 然而して玆に一の驚くべき怪むべき勢力あり何ぞ主人をして世に彼哲學者めきたる口調を踏ずるものあるを惹起せしめ又主人をして此蕪き文を草せしめたる「木村秀子の履歴」是なり

嗚呼「木村秀子の履歴」ハ主人に如此影響を與へゝり。 其餘響ハ尚延て主人の草せる間接の「木村秀子の履歴」の讀者に迄及ふべきや主人ハ顧ふて已まざるなり。 木村秀子「病中著す所の書あり交際論と題す議論正確筆力雄健病中の筆に似ず」と。 主人此文病中の作にあらず讀者其議論正確筆力雄健ならざるを怪む勿れ。

いらつめ記者足下　　　青墓園主人拜

月報

○ 私立明治女學校。 先頃中より飯田町仲坂上に移轉して其校舍を新築せし仝校ハ 此程全く竣功せしを以て新に作り成せし校

舍を上帝に捧げまゐらせんとて去月五日午後より内外の紳士貴婦人を演請して其献堂式を擧行せられぬ。當日ハ校長木村熊二君の招辭、敎頭巖本善治君の献堂祈禱其他仝校議員、敎授諸氏の演説祝辭及び生徒の唱歌、奏樂祝文朗讀等あり中にも仝校本科生徒伴よし子、久野しげ子の英文朗唱にハ來賓もほと〳〵感じて見えけり四時過ぐる頃いとも靜肅に其儀式を終へられし後來賓に茶菓の饗應ありたり。仝校ハ該殿新だに生徒の寄宿をも許し智育を和洋折衷にとり耶蘇敎を以て專ら生徒の德育を養成せられ日を追ふて盛況に赴くと云ふ。

○唱歌會。東京府師範學校の音樂敎師四竈訥次氏が會主となりて去月廿日日比谷大神宮社內に催せし仝會ハ府下の公私立五十餘校より來會せし生徒及び會員千二百名の多きに至り頗る盛況なりし由仝會ハ專ら音樂を奬勵品評して其改良上進を謀り兼て親睦を厚ふせんとの主意なりとぞ。

○東京金蘭會。去月三日午後一時より新宿高田氏別邸に於て催せる仝第六回ハ會場の遠隔なりしにも拘ハらす來會せし者頗る多く會員互に打解けて心のまに〳〵談話遊戲を爲し餘興にハ荒木古童の尺八、其他席上青萱の揮毫等もありて頗る盛會なりき又仝會ハ會員協議の上更に規則を改定し益會員諸氏の親睦和合を計畫せらる、其準備かた〳〵本月ハ休會して來春一月にハ愈益盛大に開會せらる〻との事なり。

○通俗婦人講談會。去月廿六日午後より本郷小學校に於て催せる仝第三回ハ(腹中の虫)醫學士竹中成憲、(杞憂論)鵜橋國太郎、(小兒の爲め)石川米子等諸氏の通俗平易なる講談ありたり。

○東京師範學校女子部。仝部にてハ先頃米國婦人スツレート夫人を聘して英語の發音文法其他育兒法等の敎授を囑托せし由又仝部にて去月廿六日に催せる談話にハ席上櫻井幹事の幻燈抔もありていらつめ第五號に掲載せし稅所篤子君の作歌を仝校音樂敎師奧氏が彈曲せられし由なり。

○東京婦人交際會。在來婦人交際の弊害を矯正し兼て他の模範たらんとの主意にて二三有志婦人の發起に係る仝會ハ其發會を去月廿六日午後四時より富士見町富士見軒に於て開會し會員の紹介談話、食事其他席上會員遠山きれ子、森宮子の和琴合奏等も

ありたり　會員の資格を教員、官立學校卒業生其他これと同等の教育を受けし婦人に限らるゝとの事なり。

○平島裁縫女學校。　平島喜平氏が校長たる京橋山城町の今校ハ日を追ふて隆盛に赴くに付き喜多見とも子、賞名あや子兩女史を幹事として益校務を擴張せらるゝ由。

○廣島高等女學校　ハ近日天神町に設立せらるゝの計畫あり。　校主は山中正雄氏、校長は千田夫人、學監ハ西川婦人、教師は杉岡みつ子其他廣島師範學校の男女教員數名が受持たるゝ由。　女學校の設立は同縣にては此度を嚆矢とぞ。

○京都府尋常師範學校女生徒の体操。　十一月十二日森文部大臣の同校を巡視せられし際、女生徒の体操は余程上出來にて十分体育の價値ありと稱せられ。　又附屬小學校を巡覽ありしときには尋常科第四年級女生徒の唱歌「こもごちきたれ」の一曲を聽かれよく出來たの一言ありしかば生徒ハ大に喜び益勵み居るよし。

○大津婦人懇會。　十一月廿日大津寺内近松別院顯証寺大廣間に於て開きたる同會は、中井滋賀縣知事の夫人を始め園田書記官片岡警部長、七里收税長、中西滋賀郡長の夫人其他の婦人二百餘名の催しにて當日ハ奏樂祝文演説等ありて中々の盛會なりし由。

○松山婦人交際會。　愛媛縣松山にては去る五六月の頃より附屬小學校訓導喜多見さき服部たか二氏の發起にて有志の令閨令孃の催し居られたる談話會を今回題號の如き組織に變ぜられ毎土曜日修身、讀書、家政、音樂の四科を研修することとなれり藤村知事、藤尾、野村兩部長、眞崎警部長渡邊病院長の夫人方も贊成せられたれば善良なる結果を得らるゝや期して待つべきなり。

（本年十一月十日愛媛教育會協會雜誌）

○新發明小林機織器械。　小林新作氏が發明に係る機織器械は其構造如何にも簡單に價もまた安く之を使用するに水力又は蒸氣力を以て運轉するを本分とすと雖も此等の力を藉らざるときは人力を以て五六臺の器械を運轉するを得るものゝよし同氏は新潟縣の產にして父辛兵衛は同地の名產木綿織物の開祖なるが氏が六歳の時に亡せしかば其弟之を繼續して近隣の婦女に傳習中氏も生長して之を見習ひ又機械の迂にして徒に勞力と時間を費すを憾み十有三年間其改良に苦心し前後數回家產漸く傾いて志猶挫けず遂に今回の發明ありしといふ。

（本年十一月十七日時事新報節略）

○催笑草。　アラビヤに一奇草あり其丈尋常にして黄金色の花を着け種子殼は軟柔にして天鵞絨の如く一個の殼は各二三の種子を蓄へ形黒豆の小なるものに似たり土俗之を稱して「笑草」といふ蓋し其よく人を笑はしむるの奇効あるが爲なりアラビヤ人其種子を日光に乾し之を粉にして儲藏す若し此細粉一匙を人に與へ服用せしめんにはその人如何に沈默寡言の性なりとも忽ち變して狂人の如く或は躍り或は叫び或は笑ひ或は語るにいたる其奇効實に神の如し然れども凡そ一時間を經るの後に至れば其身体疲勞して昏倒し眠ると數時にして覺む然る後本性に復すると得其先になしたる擧動に至ては絶て之を知るとなしといふ。（本年十一月廿日郵便報知新聞）

○炭粉の効能。　去月三十日十勝國より函館に入港したる渡島丸に炭粉に詰めたる生鮭ありしが之を驗するに其形生々として恰も當日漁獲せしもの丶如く其味も亦生魚と同樣にて腥味の少しく減したるを覺えたりといふ（本年十一月廿日時事新報節略）

本社曩に我が親愛なる貴女諸君の朝な夕なに伴ひ給ふべき友達にとて**貴女の友**と云ふ雑誌を發刊し聊か微力を盡さんとハ心掛けたりき去る程に諸君の愛續日一日より増加し今日に至りてハ既に數千部の多きを刷出するに至れり是れ世の進歩の然らしむる所とハ云へ又諸君の愛讀わるにわらずバ決して斯る盛運を見るにハ至らざる可きなり然れども本社ハ未だ此に満足せず進で増刊の挙を圖らんとする折しも亦貴女諸君の續々書を寄せて之を促し給ふに會せり依て**本月**より更めて五日、十五日、二十五日の**三回**發行とし記事を精撰し書様を吟味し漸く將に世の貴女諸君の良友たるに恥ぢざるの好誌たらしめんとする江湖の貴女諸君幸に一層愛顧の命を賜はらんことを希望の至に候也

貴女の友の増刊の披露

○本紙代價左表の如し御注文の節ハ前金にて御申込被下度候

部數	一部	六部	十二部
前金	八錢	四十六錢	九拾錢
郵稅	一錢	六錢	十二錢

貴女の友記載の事項

○貴女の友 本欄ハ本社意見のわる所を陳述して世の婦女諸君のため貴女たるに背かざるべき方針を明にする所とす

○家政 本欄ハ家事經濟、調理、裁縫、交際を始め家政上に係る一切の方法を記載する所とす

○保育 本欄ハ乳兒心得、養方、家庭の教育を始めとして一切兒女の保育法を記載するの所とす

○學藝 本欄ハ文藝、音樂、理科、經濟を始めとして貴女がたに必要なる一切の學藝を記載する所とす

○叢談 本欄ハ美術、小説、傳記等を始めとして貴女諸君の心意を慰めながらに教育の妙味に薫陶せらるべき諸般の事項を掲くる所とす

○論説 本欄ハ内外大家諸君の高論卓説を掲載する所とす

○新報 本欄ハ内外貴女社會に關する事項を報道して婦人社會の事情を知るの供する所とす

明治廿年十二月
東京日本橋區本町二丁目一番地
發行所 東京教育社

遞信省認可

社告

○いらつめ代價　一冊金八錢　六冊（半年分）金四拾五錢　十二冊（壹ヶ年分）金八十錢○毎月第二土曜日發兌

雜誌代ハ前金ニ付御注文ヲ受クルモ金子到着セサレハ配達セズ金子盡クレハ配達を止ム依テ金子ノ切レサル樣前以テ御差出ヲ乞フ金子御差送ノ手續ハ郵便小爲替ナラハ拂渡郵便局トアル所ニ本郷郵便局ト御記入ノ事幷ニ受取人氏名トアル所ニ本郷湯島天神町壹丁目五十九番地成美社ト御記入ノ事○郵便切手ニテ御差送リナラハ一錢切手一割増ニテ御差送リノ事二錢以上ノ切手ハ御斷

○廣告料一行（五號文字二十一字詰）金五錢十一行以上金四錢五厘二十一行以上金四錢
但前金ニアラサレハ載セズ

いらつめ賣捌所

東京神田區佐柄木町	東海堂
同　同　雉子町	團々社支店
同　同　淡路町一丁目	巖々堂
同　日本橋區蠣売町壹丁目	信文堂
同　同　新葭町	良明堂
同　本郷區元富士町	盛春堂
同　同　春木町貳丁目	解明堂
大坂心齋橋備後町	岡島支店
堺熊野町	高山慶雲堂
名古屋本町貳丁目	石版舍
信州長野大門町	會眞社
陸中岩手肴町	華文舍

持主兼印刷人　武田安之助
編輯人　正木政吉
主幹　新保磐次
發行所　東京本郷區湯島天神町壹丁目五十九番地　成美社

以良都女　第一巻　明治二〇年

発行者　船　橋　治

発行所　不二出版株式会社

東京都文京区本郷三丁目一六番六号

電話〇三(八一二)四四三三

振替　東京六―九四〇八四

印刷所　(有)　東　光

製本所　青木製本所

一九八三年一月二五日／復刻版発行